



巻頭言

5校の連携で新しい役割を創出するという発想

筑波大学附属久里浜特別支援学校長

西垣 昌欣

俳人松尾芭蕉が、「おくのほそ道」の旅の中で門下の立花北枝に説いた話の一つに、「不易流行」の話があります。「芸術の根本には、時代を越え、流派を越え、また芸術の種類を越えて、ある変らない、一貫したもの」（井本農一『芭蕉入門』、講談社、1977年）があり、それを芭蕉は不易と表現し、「その不易なものは、時代や流派や芸術の種類によって、表れ方は変化流行してやまない」（同上）という考え方を北枝に伝えた、とされます。

この「不易流行」という言葉は、教育の変革の必要性が語られる際に、しばしば用いられています。平成9年（1997年）6月公表の中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（第二次答申）では、社会の変化への確に対応した教育を進めていく上で、「時代の変化とともに変えていく必要があるもの」（流行）と、「時代を超えて価値のあるもの」（不易）があるとし、教育において「不易」の価値の実現を目指していく必要性が「今後ますます大きくなっていく」ことが述べられました。最近では、平成28年12月公表の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）においても、「不易と流行」という表現が用いられました。「不易」「流行」の対比は、バランスのよい変革を目指す上で、重要な気付きを私たちに与えてくれます。

再び芭蕉の話に戻りますが、「おくのほそ道」の旅を終えた後、蕉門の俳諧は一変した、といわれています。これは「不易流行」の具体的な展開として「新しき」が追究されたことによるそうです。芭蕉が旅を経て思い至った「不易流行」とは、「もっともその時代らしい新しい発想や表現、その作者としての独創的な発想や表現があって初めて、本質的なものが表される」（『芭蕉入門』）という考え方であり、作品の具体化に当たっては「流行」に重点がおかれたのが実際のようなのです。「流行り」を追いかける薄っぺらなものではなく、本質を踏まえた上での独創的な創作への挑戦が図られた、ということかと思えます。

さて、本題です。それぞれ歴史と伝統、学校文化、専門性がある附属特別支援学校5校が連携を図る意味は、「不易」を基にして「流行」に挑むことなのではないかと思えます。障害種が異なる5校が存在すること自体に大きな特徴を有する筑波の特別支援学校が、その強みを生かし、「連携」で時代に対応する、という考え方です。附属各校の強みが結集されることで、新たに創出できる役割は多いと考えます。また、つくば地区（後背）には国内最大といえる障害科学の研究組織が控えています。学校単体で時代に挑む姿勢も大切ですが、5校が大学も含めて連携することにより社会への貢献や教育・研究の進展を図るといった発想が、今後一層重要になると考えています。連携推進グループには「連携」の要となり、まずは現職教員研修を軌道に乗せ、その先には、かつて特別支援教育研究センターが目指していたいくつかの機能を再び取り戻してくれる道づくりを期待しています。



7.22～8.2 免許法認定公開講座を開催しました

7月22日（月）～8月2日（金）の12日間をわたり、筑波大学免許法認定公開講座を東京キャンパス文京校舎において開催しました。本講座は、特別支援教育の基礎理論をはじめ、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由の別に「理解」「心理」「指導法」のコースを設けており、毎年多くの受講者をお迎えしています。

本年度は全国から延べ約500名のご参加をいただきました。当日は、講師が提供する特別支援教育の最新の知見や指導法に耳を傾け、日々の実践に生かすための学びを重ねる時間となりました。



特別支援教育の最新の知見が多くの受講者に提供された

8.22 教材・指導法の公開講座を開催しました

8月22日（木）、教材やそれを活用した指導法に関する公開講座を東京キャンパス文京校舎において開催しました。筑波大学特別支援教育連携推進グループ（附属学校社会貢献準備会）では、附属特別支援5校、人間系インクルーシブ教育システム開発リサーチユニットとの協働により、筑波大学特別支援教育教材・指導法データベース（日本語版・英語版）を構築・運用しており、今回は掲載教材を基に教材づくりについて考えてみました。前半は視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由それぞれの分野から提供された教材の紹介とともに、子どもの困り感に対して指導者が教材を与えるのではなく、指導について考えることが大切ということ、また、それぞれの分野で有効な教材が、異なる障害種、あるいは、障害がない子どもにとっても効果的な学びが得られることについて、20名を超える受講者、ならびに、映像配信で聴講した茨城県大子町の皆さんと共有しました。後半は、データベースや会場の展示教材を眺めながら、勤務先に在籍する子どもに提供したい教材を試作するワークショップを行いました。今回は幼稚園、小学校、特別支援学校はもとより、介護事業所等の様々な分野から受講者が集いました。そのため、各分野での課題意識を知ることができ、多くの気づきや知見を得ることができました。

筑波大学特別支援教育教材・指導法データベースは、スマートフォンでもご覧になれますので、ぜひ一度のぞいてみてください。



楽しみながらのグループワークに
会話が弾む受講者



附属特別支援学校5校・特別支援教育連携推進グループ・人間系障害科学域の協働による
筑波大学特別支援教育教材・指導法データベース



筑波大学発「オリンピック・パラリンピック教育」

2020年、オリンピック・パラリンピックという世界的スポーツのイベントをきっかけに、共生社会の実現に向けたスポーツ交流が徐々に盛んになっています。

本学では、以前より人間の尊厳や人類の平和の理念に基づいた「オリンピック・パラリンピック教育」に力を注いでおり、附属学校においても様々な実践が展開されています。SNE-Tでは、各校の取り組みの一端を紹介します。



その2 附属聴覚特別支援学校の実践

来夏の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、各部で様々なオリ・パラ教育が行われています。小学部ではボッチャ体験、中学部・高等部ではラート運動体験や車椅子バスケットボール選手の講演会・体験などが行われています。こうした学習を受けて生徒達の自発的な活動の中で生まれたオリ・パラに関わる活動として、前回大会（ブラジル）開催時の2016年文化祭における中学部1年生の展示発表「Athens1896→Tokyo2020 ～オリンピックの歩み～」と生徒会の送別レクリエーションをご紹介します。

□ 文化祭における展示発表「Athens1896→Tokyo2020 ～オリンピックの歩み～」

本校の文化祭「櫻祭」は、毎年11月上旬に行われます。9月になると、中学部では各学年で発表テーマについて話し合いますが、この年の中1はほぼ全員一致でオリ・パラを扱うこととなり、文化祭全体のテーマ「芽～新たな未来に向かって～」を踏まえて、学年テーマを決定しました。

「歴史」「選手」「競技」「パラリンピック・デフリンピック」の4グループに分かれ、グループごとに参考書籍やインターネットなどから情報を集め、掲示物を作りました。大会の歴史、年表、日本の獲得メダル数の推移、次回冬季平昌大会、メダルの規格等、中学部内アンケート上位の選手や種目、東京大会で活躍が期待される選手、メダリストの出身地地図、東京大会追加種目、デフリンピック開催地等をまとめました。当日は大盛況となり、同窓会賞を受賞しました。

なお、中学部は例年、ソウル聾学校とオンライン交流を行っています。2年後の冬季大会が韓国・平昌での開催を受け、文化祭後の12月の交流内容はオリ・パラとなり、韓国がメダルを獲得した種目や選手、ソウル大会、平昌大会について調べ学習をしながら、クイズや質問を作成し、非常に活発な交流を行うことができました。



力作の文化祭展示とそれらを熱心に読む児童生徒

□ 生徒会行事委員会による送別レクリエーションなど

3月の送別レクリエーションは、例年、前半がクイズ大会、後半は球技大会となっています。クイズ大会の問題は年々レベルアップしており、大人でも正答するのが難しいほどですが、デフリンピック出場を目指している生徒もおり、多目的室の図書コーナーにあるオリ・パラ関連書籍もよく読まれているようで、生徒達は次々と正解していくため、教員が驚くほどです。冬季平昌大会が開催された2018年には、カーリングを模したオリジナル種目が球技大会で行われるなど、オリンピックへの関心は非常に高まっており、オリ・パラ教育の成果は確実に実っていると感じています。（廣瀬 由美）

現職教員研修中間報告を行いました

筑波大学では、特別支援教育における専門的知識と実践力に優れた教員の養成を目的として、教育局特別支援教育連携推進グループ、附属特別支援学校5校、筑波大学人間系が協働しながら現職教員研修を実施しています。本研修は、附属特別支援学校5校を活用した実践型の研修であること、人間系教員から専門的知識を幅広く学ぶことができることが特色です。

本年度の研修には、北海道新篠津高等養護学校より八木郁朗教諭を研修員としてお迎えしています。八木先生はICTを活用した授業づくりに力を注いでおり、研修におけるテーマを「一人称視点による動画支援教材を使った授業実践と動画コンテンツの共有化について」と定め、附属大塚特別支援学校を中心に実践や検証を重ねてきました。中間報告では、長年の教職経験から見出した動画活用の教育的効果および自己の実践を通じた検証について発表を行いました。会場に集まった附属特別支援学校5校の教員は、研修経過への質疑とともに、八木先生の動画づくりについても様々な協議がなされました。

研修は折り返し地点となります。今後は八木先生が作成したコンテンツを活用しての授業づくりについて、さらに検討を深める予定です。



半年間の研修成果について報告する八木教諭



熱心な議論を重ねる八木教諭と
附属特別支援学校5校の教員

附属特別支援学校5校・特別支援教育連携推進グループの催し

- | | | |
|------------|--------|-------------------------------|
| 11月13日(水)～ | 15日(金) | 聴覚障害教育担当教員講習会 [附属聴覚：千葉県市川市] |
| 12月6日(金)～ | 7日(土) | 自閉症教育実践研究協議会 [附属久里浜：神奈川県横須賀市] |
| 2月6日(木)～ | 7日(金) | 肢体不自由教育実践研究協議会 [附属桐が丘：東京都板橋区] |
| 2月14日(金) | | 知的障害児教育研究協議会 [附属大塚：東京都文京区] |
| 2月15日(土) | | 視覚障害教育研究協議会 [附属視覚：東京都文京区] |
| 3月24日(火) | | 第2回特別支援教育研究セミナー [東京キャンパス文京校舎] |

編集後記

東京・茗荷谷には、秋のさわやかな空が広がっています。子どもたちにとって学びの多いこの学期、お送りした情報が先生方の教育活動のヒントになりましたら幸いです。次号は12月を予定しています。

発行：筑波大学特別支援教育連携推進グループ
(社会貢献準備会)

112-0012 東京都文京区大塚3-29-1

TEL：03-3942-6923 FAX：03-3942-6938

<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>

mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp